

ていたと云い得るのである。

## 法然上人の和歌について

武 藤 善 史

今日、法然上人の和歌として世に知られているものは二十三首を数えることができる。すなわち「勅伝」第三十卷に十七首、第三十四卷に一首、第二十一卷に今様歌一首と「和語証録」第四に一首、「高田本法然上人法法絵」巻下に二首、「弘願本法然聖人絵」第二に一首の合計二十三首である。

「和語証録」第五に「一百四十五ヶ条問答」があるがその中で歌をよむことの是非の問答が出ている。すなわち

歌よむは罪にて候か。

答。あながちに得候はじ、但罪ともなり。功德ともなる。

上人の答の意味は、それが専修念仏の助けとなるならば

それは功德となり妨げとなるならば罪となるというのである。

無量寿經には

至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正

覺唯除五逆誹謗正法とある。

至心に如来を信じ、至心に如来を愛し、至心に浄土へ生れんと欲して念仏を申すならば、必ず浄土へ往生できるのである。

○三心の中の至誠心のことを

往生はよにやすけれとみなひとのまことの心なくてこそせぬ。

至誠心とは真実心のことであり、外に賢善の相を現わし、内に虚仮心をいなくことなく、身口意の三業に修業するところの行業はすべて真実の心をもつてすることである。

至誠心とは真実心のことであり、衆生本有の仏性である。

一切国土の悪を捨て善を選びることによつて仏の一切の善根を満して成仏できるのである。

○夏

われはたゞほとけにいつかあふひくさくろのつまにか  
けぬ日そなき

四修の中の無問修を歌つたものであり

心常親近憶念不断 と観経流でいつている。

○逢仏伝捨身命 といへることを

かりそめの色のゆかりのこひにたにあふには身をもをし  
みやはする。

宗教の中心真隨は精神中の生命といわれる感情にある  
のであり、その中に於て我れと彼れとをまつたく同一視  
し一仏に対しては最もうやまつていながら仏と我れとを一  
体的にするものは感情の愛である。

彼れと我れの間を親密に、そして最も強く、堅く結ぶ  
ものなのである。

常に如来を思い、心の妻として忘れずに、そして幸福  
を共にする弥陀を慕うのに身命をすてることは何も惜し  
くないという氣持こそ実に尊いことである。

○

あみた仏と心はにしにうつせみのもぬけはてたるこそ

すゝしき

○

あみた仏と申はかりをつとめて浄土の莊嚴見るそうれ  
しき

○

あみた仏にそむる心のいろにいてはあきのこすゑのたく  
ひならまし

これらの歌は、いづれも一心称名の相を詠じたもので  
ある。

口に称名を、意に弥陀を念じ、魂を投入して弥陀が我  
れか、我れが弥陀かという精神状態に入り一心に念仏を  
することによつて往生の一要素となるのである。

三昧の思惟と正受について、思惟とは極樂を心に想い  
こらす方法であり、正受とは観仏三昧を成就する方法で  
ある。

観仏を得たということは三昧を成就したことである。

三昧発得をして見仏するということはあたかも人の心  
が暗黒界より光明界に転じた様なものである。法然上人  
が念仏三昧に入り、次第に如来の恩恵をえて弥陀の慈愛

にふれ、智恵のしぐれに会う様にまで、まことに不思議な色をそえ、次第に弥陀にそまる様になるのは、法然上人の眞の姿なのである。

## 大我の研究

(近世の浄土宗に於ける信仰運動批判)

山田啓隆

江戸時代における浄土宗は、幕府の優遇と政僧の活躍によつて寓宗的地位から先進諸宗の班列に加わり得る教団にまで發展した。

しかしこれはあくまで制度乃至組織として教団であつて、法然の意を汲む専修念仏の同信同行的信仰教団としてではなかつた。しかも内には、徳川家との師檀關係の緊張を如何にして持続するかという問題と色衣をまつて貴紳に近づかんとする世俗化とそして檀家制度の確立によつて、僧侶は著しく墮落したのである。

特に浄土宗の場合、致命的であつて、所謂法然の専修

念仏の喪失という問題をかゝっていたのである。

その中であつて、二種の信仰運動、実践運動が教団の下層部に、しかも地方から勃興してきたのである。

一つは当時の寺院が俗化しているのを慨歎して俗塵のいたらない静閑の地に道場を設けて、仏制を守り念仏修行に専入して、もつて宗祖の恩に報いんとす運動——捨世派

いま一つは僧侶にして戒律を守るものが少く、著しく僧風が墮落してきたのを慨歎して、とくに仏制の律儀を復興せしめんとした運動——興律派とがある。

前者は新念仏運動であり、後者は念戒一致と云うべくとも理論でなく実践である。しかも捨世派は形式的に教団の確立が進められてきた時期に發生し、興律派は教団が安定し僧侶の生活もようやく安逸放墮に溺れてきた時に興つてきたのである。そしてこれらの信仰運動はその發生よりみて、宗門警覺の意義があると考えられる。

捨世派の新念仏運動は戦国末の称念より始まり、数多くの学僧の中で無能の如く持戒念仏の興律の僧もあつてとくに仏制の律儀を復興せしめんとする運動とも接近し